

オーダーメイド医療と「K・リゾレシチン」を使った 栄養療法で心身の健康を取り戻し、がんに打ち克つ —糖鎖やリン脂質が健全に機能してくれることが「がん対策」にも必要—

取材協力 ● 神津健一 医療法人社団・一友会ナチュラルクリニック代々木会長

資料提供 ● 医療法人社団・一友会ナチュラルクリニック代々木

取材・文 ● 宮西ナオ子 フリーライター

東京四ツ谷にある本物研究所

は、これからの子どもたちのために「人と地球が元氣」で明るい未来を創造するという理念から生まれた企業だ。「人にやさしい」「地球にやさしい」モノ・コトをライフスタイルに取り入れ、豊かな毎日を過ごすために「ほんもの商品」を全国の販売店を通じて行っている。この本物研究所が今、特に注目しているのが、医学博士の神津健一氏が開発したK・リゾレシチンだ。

K・リゾレシチンとはどういうものなのか？ 開発者の神津氏は、米国・APU大学院博士課程修了、日本医学交流協会理事でもあり、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などの出演も多数。『心

の病を癒す脳内食品—Q・E

Qも高まる』ほか多数の書籍を著している。また予防医学・代替医療振興協会理事長を務め、医療法人社団・一友会ナチュラルクリニック代々木の会長としてがん治療にも取り組んでいる。

精神科や心療内科で基本サプリメントとして採用されている「K・リゾレシチン」

がんになる原因といっても一概には言えないものの、そのひとつにストレスによるものがあるという。そこで今、がん治療にも成果を認められているのが「K・リゾレシチン」だ。すでに精神科や心療内科が、基本サプリメントとしても採用している

ものだ。

「現代社会では、『キレる』という言葉がよく使われるようになってきましたが、これは神経細胞の異常が原因のひとつと考えられます。情報がうまく流れず渋滞したり、はみ出してしまうためにイライラし、不安に陥ったり、怒りっぽくなったりするわけですが、ときには第三者に危害を与えることもある。また自分の中での情報が神経組織内にこもってしまえば、『引きこもり』になる。それが高じて生きることの目的を失ってしまえば、自殺への道を選んでしまうことさえあるのです」

と、ナチュラルクリニック代々木の神津健一会長は警鐘を鳴ら

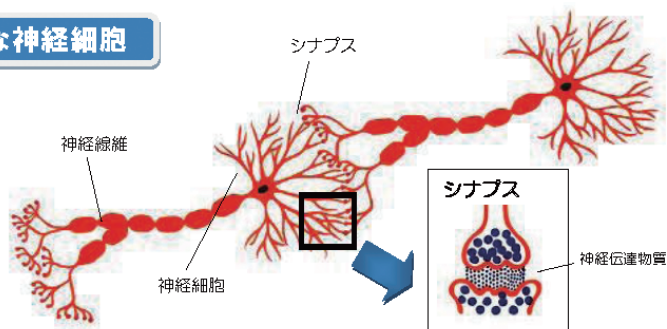


取材を受ける神津健一会長

す。どうして、そのようなことが起きるのか？ 図1・図2の2つの神経細胞を見ていただきたい。図1は正常な神経細胞で神経線維はふっくらしている。情報伝達に必要な神経伝達物質アセチルコリン（レシチン）を摂っていると、ドーパミン、GABA、セロトニンなどが増え、ビタミン、ミネラルがバランスよく存在する。つまり健康な人の神経組織は太く、情報伝達がスムーズである証なのだ。

一方、図2の神経細胞は異常な神経細胞で、やや細っている。神経伝達物質（アセチルコリン）

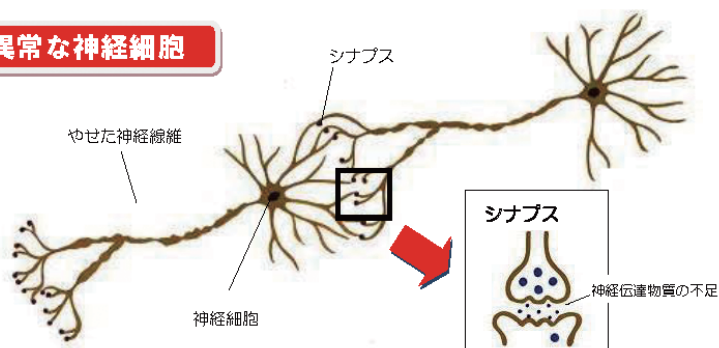
正常な神経細胞



情報伝達に必要な、神経伝達物質アセチルコリン（レシチン）を摂ると、ドーパミン、GABA、セロトニン等が増え、ビタミン、ミネラルがバランスよく存在している。神経線維は、ふっくらとしている。

図1

異常な神経細胞



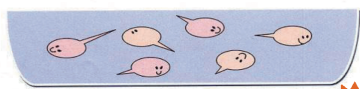
【弾性限界・臨界】
神経伝達物質（アセチルコリン）の不足とアンバランスにより、神経線維がやせ衰え、情報伝達が困難になっている。一方、アドレナリンやノルアドレナリンなどのホルモン物質が増えて攻撃型の性格に変質したり、逆に無気力状態に陥っている。忍耐力が乏しくなり、弾性限界・臨界に達している。

図2

細胞の真実

スタンフォード大学細胞生物学博士
(元)教授 ブルース・リプトン
The Biology of Belief
by Bruce H. Lipton, Ph.D.

【A】コントロール状態



【検体】ヒト血管内皮細胞のクローン

【B】薬剤を投与



逃走、防御(防衛)

【C】栄養剤を投与



増殖、成長

図3

「私たち人間の身体は60兆という細胞群によって構成されている。この細胞群は、それぞれが独自の生命活動を行っている。その生命活動は、細胞の生存と増殖、そして死の3つのプロセスから成り立っている。このプロセスは、細胞の内部と外部の環境によって制御されている。細胞の内部環境は、細胞の遺伝子によって決定されている。細胞の外部環境は、細胞の周囲の細胞や組織によって決定されている。細胞の生命活動は、細胞の内部と外部の環境によって制御されている。細胞の生命活動は、細胞の内部と外部の環境によって制御されている。」

の不足とアンバランスにより、神経線維がやせ衰え、情報伝達が困難になっている状態だ。精神障害になっている人の神経組織はこのようにきわめて細く痩せ衰えている。アドレナリンやノルアドレナリンなどのホルモン物質が増えて攻撃型の性格に変質したり、逆に無気力状態に陥ったりする。忍耐力が乏しくなり、弾性限界・臨界に達している。情報伝達をバトンタッチ

し、情報を切り換える役割のシナプスが少なく、今の情報過多の時代ではトラブルになることが多い。
「現代人の神経細胞がやせ細っているのは誤った食生活、膨大な食品添加物や残留農薬、環境汚染などによって神経組織が傷を負い痩せ衰えていることなどが考えられます」
と、神津会長は言う。

これを解決するためには十分な栄養や酸素、ホルモンを各組織に供給し、痩せ衰えた神経組織の傷を癒し、太らせることだ。そのためにはあらゆる栄養の受け皿ともいえるべき、「K・リゾレシチン」を摂ることが改善の力

痩せ衰えた神経組織の傷を癒し、太らせるーナチュラルタリニック代々木で行っている細胞膜栄養療法

ギとなる。これがナチュラルタリニック代々木で行っている細胞膜栄養療法だ。
「細胞には薬ではなく、栄養が必要という実験は、元スタンフォード大学の細胞生物学博士で教授のブルース・リプトン (Bruce H. Lipton, Ph.D.) 博士が行っています」(神津会長)
ヒトの血管内皮細胞からクローンをつくり、図3のような3つの試験を実施し、「細胞の真実」を唱えた実験だ(図3-A・B・C参照)。

て構築されています。これは加齢とともに減少し、7割が亡くなると死滅すると言われます。そして、これらの細胞はすべて栄養によって成り立っており、薬という異物に対しては拒否反応を示すのです。そこで単体の成分で化学物質（化学薬品）を投入すると、細胞は逃走しますが、複合栄養の場合は我先にと争ってこれを奪い取ろうとするのです」

細胞は薬そのものが毒物であることを知っているので、逃走する。実験では人工的につくられたバラバラの細胞（クローン）群だが、実際には、細胞と細胞はお互いに連結しているのです、異物（薬剤）が入ってきたも逃げられない。そこで抵抗し、苦しみを訴え、助けを求める。その状態が副作用という形で認識されるわけだ。

「そもそも薬とは栄養学的には毒物であり、劇物の範疇に入ります。つまり薬を使うことは、病気の症状を呈している細胞を薬剤の力で屈服させ、一時的に症状を落ち着かせているだけです。熱や痛み、痒みなどが抑えられ、薬で治ったと感じるかも

しませんが、実際には、私たちの体内にある免疫力や自然治癒力が本来の機能を取り戻し、徐々に健康を回復しているに過ぎません。薬がその有効性を発揮できるのは、細菌やウイルスなど感染症にかかったときだけで、一時的に症状を緩和したり、抑制したり、鎮静化したり、麻痺させるだけで、病気そのものを改善し回復させることではありません」（神津会長）

細胞に必要なのは薬より栄養。そして腸内環境を整えること

細胞に必要なのは薬より栄養。そして腸内環境を整えること。そこで注目されるのが神津会長の開発した低分子の「K・リゾレシチン」である。これはレシチンに天然のビタミンやミネラル、そのほか、いくつかの栄養素を加えたもので、従来のレシチンよりも消化吸収力に優れている。このサプリメントは米国のマサチューセッツ工科大学の特別研究班によっても高い評価を得、日本のいくつかの大学でもその高い有効性が認められている。

「かつては細胞には細胞の核があり、核の中には、DNAやRNAなどの遺伝子があり、細胞の核こそ命であり、エネルギーの根幹をなしていると考えられていました。でも実際には、細胞の命は核ではなく、細胞の膜が知性であり命・エネルギーを司っていることがわかったのです」（神津会長）

先述した、リプトン博士の実験を見てみよう（図4参照）。細胞の除核試験を行えば、その細胞は即死すると考えられていたが、結果はまったく逆だった。細胞の核を残したまま細胞の除膜試験を行うと細胞は即死した。細胞のエネルギーを司っているのは、細胞の核ではなく、膜であることが判明したのだ。

神津会長はこう話す。

「細胞の膜組織は、細胞の内部環境の機能を一定に保つために代謝機能の根幹をなしています。必要な酸素や栄養を取り込み、ホルモンの調整、老廃物や有害物質の排出、ウイルスや細菌から身を守るなど、外敵からの攻撃に対処しています。その細胞膜の約50%はタンパク質であり、残りの約40〜50%は、リン脂質

（レシチン）ということです。肝臓内の脂肪の75%、血管壁細胞膜の90%、脳細胞の30%もリン脂質（レシチン）です。血中のコレステロールのコントロールも血管壁や血中にあるリン脂質によって調整され心臓や脳の働きを助けています。リン脂質はタンパク質と協調して環境からの伝達に反応します」

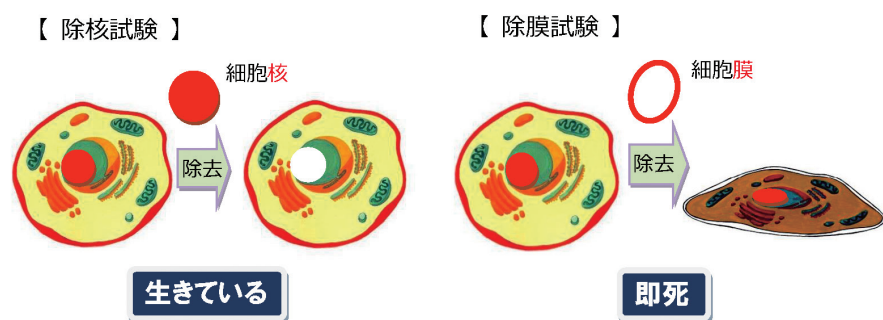


図4
◇細胞膜は、命・知性・エネルギーを司っている
◇細胞膜の50%はリン脂質（レシチン）でできている

「K・リゾレシチン」は大豆から抽出したものであり、全細胞膜に必要な「栄養素」で、コントローラーとして脳内のバランスをサポートする。特にストレスの多い現代社会では極端にリン脂質が消耗し脳神経組織や内臓器官などに多くのダメージを与え、諸病を誘発しているという。さらに細胞膜栄養療法でもうひとつ欠かせないものが糖鎖なのだ。ガラクトース、マンノース、グルコース、フコース、N-アセチルノイラミン酸、N-アセチルガラクトアミン、N-アセチルグルコサミン、キシロースの8種類の単糖が鎖状に連なったもので人間を構築している細胞の膜組織の表面に産毛のような状態で密生しており、さまざまな情報をキャッチし、異物や細菌、ウイルスを識別し、細胞間の情報伝達、細胞同士の認識、ホルモン作用、異物の排除など生命維持のカギともいえるべき重要な働きをしている。

「糖鎖は細胞の顔とも言われ、さまざまな情報をキャッチしています。細胞膜内のリン脂質（レシチン）と連携して、あらゆる情報を素早く細胞に伝達します」（神津会長）

糖鎖とリン脂質（レシチン）が連携してNK細胞やキラーT細胞にがん情報を伝達し処理する

もし糖鎖にその情報の意味が通じないと異常反応を起こすのは言うまでもない。そしてその異常反応が病気となって現れるわけだ。

「現代人は環境の変化や化学物質の過剰摂取やストレスなどで糖鎖の数がかつての人間に比較して40%以上も減少しており、これが生活習慣病や難病発症の原因になっています」（神津会長）

私たちの体内では毎日5000個ほどのがん細胞が生まれているが、がんにならずに済むのは、糖鎖とリン脂質（レシチン）が連携して素早くNK細胞やキラーT細胞にがん情報を伝達し、処理しているからなのだ。そこで、糖鎖やリン脂質が健全に機能してくれることが、がん対策にも必要だという。

「K・リゾレシチンも糖鎖も元々生体の細胞膜組織にとって必要不可欠なもので、たとえ長期間続けても、プラス効果はあつ

てもマイナス効果はありません。免疫機能が高まり、がんをはじめとしてアルツハイマーやアレルギー、糖尿病やストレスの緩和などに大変有効であるという症例も多い」と神津会長。

それでは次に症例をご紹介します。

症例報告—糖鎖やリン脂質が健全に機能してくれることが「がん対策」にも必要

●子宮がん…女性（48歳）

子宮頸がんⅡ期（7mm）。抗がん剤と放射線治療のみで手術はしないと決めて来院。来院時は顔色が悪く腰痛があった。G6PD検査（ビタミンC点滴が受けられるかどうかの検査）で、赤血球膜のG6PDの活性があるかどうかの検査を受け、活性がみられたため、自宅近くの病院でビタミンC点滴を要請。当院からはカウンセリングとアポトーシス誘導療法、免疫細胞活性療法、天然酵素反応療法、ナチュラル細胞栄養療法を行う。2カ月後には経過良好で筋腫も小さくなり、3カ月後には検査の結果からがんの消失が認められた。現在も予防のためにサプ

リメントを摂取中。

●大腸がん…男性（81歳）

大腸がん（横行結腸） 全周性腫瘍、グループ5（がんの診断確定）の状態。

他院では早急に手術が必要との診断。貧血、胃ポリープ、逆流性食道炎、排便困難な状態にあり集中プログラムを開始。ビタミンC点滴療法（50g/1回）、マイナスイオン活性療法、ゲルマニウム温熱療法（ドーム）、EMBC生体浄化療法、アポトーシス誘導療法、免疫細胞活性療法、ナチュラル細胞栄養療法を行う。2〜3日後には排便快調。久しぶりにお腹が空いた感覚が戻った。

夜の5〜6回の排尿が1回に減ったなど体調に変化が現れる。週3日、約1カ月半来院。来院時にCEA12・1が1カ月後CEA9・4になる。その後、通院はなくなったが、食事に気をつけながら元気に過ごされていた。週2回のゲートボールに参加し、町内会の活動をするなど元気に過ごされていた。サプリメントも最小限はとり、食事は好きなものを食べた。5年後に老衰にて永眠。